

## 【書評】

ジャン＝ブノワ・ナドー & ジュリー・バーロウ 著  
『フランス語のはなし——もうひとつの国際共通語』  
(立花英裕監修、中尾ゆかり訳)

大修館書店、2008 年

Jean-Benoît Nadeau and Julie Barlow, *The Story of French*, Knopf  
Canada, 2006.

丹羽 卓  
NIWA Takashi

本書はフランス語について語った書物であるが、次のようなユニークな特徴がある。

(1) 「フランス語＝フランスで用いられている言語」という視点で語られることが多いのに対して、世界のフランス語に目を向け、フランコフォニーの視点で考えている。

(2) 「パリのフランス語が規範で、それ以外は方言」という図式から自由で、フランス語には様々な変異体があることを積極的に認め、それらに階層付けをしない。当然パリのフランス語も変異体の一つと考えている。

(3) 著者がカナダ人（一人はフランス語を母語とするケベコワ、もう 1 人は英語を母語とするオンタリアンで、どちらも英仏バイリンガル）のジャーナリストで、フランス人によるものではない。

(1) と (2) の特徴は近年の社会言語学の研究を踏まえれば当然だと言えるが、フランス語に関するこうした視点からの記述はまだ一般的ではない。それを可能にしているのは (3) であろう。フランスの外側のフランス語圏からフランス語を見たときどのように映るのか、それを語ったのが本書である。著者は学者ではないが、原書の参考文献（訳書では省略されている）を見れば、F. ブリュノ、C. ブシャール、L.-J. カルヴェ、C. アジェージュのものなど、多数の学術的文献が挙げられており、きちんとした学問的裏付けのある書物である。むしろ、それを踏まえてわかりやすく書いたところに、著者のジャーナリストとしての力量を見るべきであろう。

本書は以上のようなユニークな特徴を備えた非常に興味深い書物なのであ

るが、第1部（第1章～第3章）は、むしろ意外なほど正統的なフランス語史の内容だと言えよう。ケルト人の時代から始まり、アカデミー・フランセーズの設立にまで至る時代の記述は、要を得た分かりやすいフランス語史だと言えるが、典型的な語り口で、特にユニークな点は少ない。

本書が本領を発揮するのは、第2部以降である。ここから著者の視野は、ベルギーやスイスなどの隣接する国から、ヨーロッパ全域、さらには大西洋を越えた新大陸、そしてアジア・アフリカのフランス植民地へと一挙に広がる。通常フランス語について語る場合、そのほとんどがフランスのフランス語についてであり、それ以外の地域に目が向けられることは少ないだけでなく、あくまでも周辺の事柄として言及されるにとどまる。ところが、本書ではむしろフランス以外のフランス語にこそ光が当てられているような印象さえ受ける。それほどまでに扱われる地域が広いのである。

第2部（第4章～第10章）では大航海時代以降世界に広がったフランス語の姿と、フランス革命から19世紀までのフランスの事情が描かれる。フランス革命時、フランスには地域ごとに多種多様な俚語（パトワ）があり、大革命時代以降フランス語の標準化と全国への普及の努力がなされた——こうした記述は他のフランス語史の書物にもある。しかし、フランス語はフランス国内だけでなく、隣国のベルギーやスイス、さらには海外の植民地（18世紀に失った北米植民地も、帝国主義時代に獲得したアフリカやアジアの植民地とともに）のものでもあり、そしてそれぞれの地で独自の変化を遂げたという事実を重く見るところに、著者の視点の反映がある。著者はこの多様性を肯定的にとらえているのだ。それはフランス語の標準語化と表裏一体だったアカデミー・フランセーズに代表されるフランス語の純粹主義への批判的記述へとつながる。標準フランス語は純粹でなければならず、純粹であるがゆえにフランス各地の言葉や隣接する国のフランス語、さらには海外のフランス語よりも上位にある——こうした考えは現在にまで続く（明治時代に日本語を標準化した日本も同様で、今でも「標準語信仰」は根強い）。多様性を否定するこうした純粹主義への批判的視点は本書を貫いている。

第2部のうち第10章では本国フランスから見捨てられた北米植民地のアカディア人、フランス系カナダ人がどのようにしてアングロサクソンへの同化を食い止めたか、またその地のフランス語の特徴についても述べられているのだが、さすがに著者の本拠地のことであるので、記述も詳しい。特にケベックのフランス語に対する偏見への反論には耳を傾けるべき点が多い。

第3部（第11章～第16章）では19世紀末から今日に至るまでのフランス語について語られる。まず18世紀にヨーロッパ中に輝きを放ったフランス語が徐々にその地位を失っていった様が描かれる。しかし、英語の隆盛が自然の成り行きではなく、アメリカとイギリスの意図的な行為の結果だという主張、そして、フランスの方も、外交、科学、ビジネスなどの分野で、英語の影響力増大に手を貸したという批判が興味深い。英語の大海の中でフランス語を死守するために苦闘を続けたケベックの人ならではの批判であろう。その点、北米でフランス語を守る戦いがどう展開されたかを描く第15章が興味をひく。特に、ルイジアナでの事情について日本語で知る機会が少ないので、これは貴重である。同様のことが、第14章についても言える。独立を果たした仏領植民地が植民地支配の言語であるフランス語をどう処遇したかについて記述されており、これも日本語では入手しにくい情報であり、貴重である。

第16章では、フランコフォニー国際機構の誕生とその複数言語主義が紹介される。その組織の提唱者がケベックのJ.-M.レジェだったこと、またその動きに対して、フランスの腰が引けていたことが語られる。この組織は発足時点からフランス中心ではないのである。そして複数言語主義とは、「国際機関で異なる言語の使用を積極的に推進する状態を意味」（p.294）する。それをカナダのバイリンガル政策と重ね合わせて考えてみると面白い。

第4部（第17章～第20章）は現在のフランス語についてである。第17章では変貌を遂げつつあるパリの民衆レベルのフランス語の姿を描いていて、興味深い。フランス語の姿そのものにあまり注意を払わない本書においては異色だが、これもまた純粹主義に対する著者の批判的態度との関連からは良く理解できる。この章の最後は「変化を取り除くなど、土台無理な話なのだ（中略）規則を押し付ける態度をとりつづけるなど、できるものではない」（p.318）と結ばれる。

続く第18章の「フランス人は英語を脅威と考えていない。英語の借用語をすぐさま自発的にフランス語にする」（p.332）という言葉は、英語を苦勞してフランス語の単語に置き換え続けた経験を持つケベックの人ならではの批判なのだろう。そして、第19章で述べられることは、いささか驚きである。フランコフォニーの連帯の中心にフランスがいなくていいところか、フランス人はフランコフォンの世界の人々に素通りされているというのだ。フランス抜きで、フランコフォンが世界的な規模で提携・協力しているという事実が

あるということなのだ。他方、フランス人は敗北主義に陥り、すでに英語に屈してしまっている、というのが著者の見解である。しかし実際には、「英語はフランスの旧植民地でフランス語の地位を脅かしてなどいない」(p.266)のであり、英語に次ぐ国際語として立派な働きをしていると言う。最終章では世界各地でのフランス語の将来について語られるが、それが輝かしさと力を取り戻すかどうかは、「多くが、フランコフォン——フランス人も含めて——が自分たちの状況を活かして意欲をかき立てられるかどうかにかかっている」と結ばれている。

以上、第1部から第4部の内容を、コメントを加えながら概括した。本書はフランス語の発祥の地であるフランスにおけるフランス語の確立から説き起こしているが、フランス語を真に国際語と捉えて記述を進めている。言い換えると、本書は脱中心主義のフランコフォニーの視点でフランス語を見ているのだ。フランスがフランス語使用の中心というわけではなく、フランス語でつながれたフランコフォニーを重視しているのである。

この見方は、フランス語に対する新しい見方だと思う。20世紀の終わりから世界の英語の多様性に着目し、英語を複数形で“Englishes”と呼ぶようになってきている。イギリスやアメリカの英語を中心にすえてそれ以外の英語の変異体を一段低く見るという考え方から、いくつもの変異体を同等にみなすという考え方が、少なくとも学問的には力を得てきた。しかし、本書によれば、フランス語で書かれたものはフランス以外の地のフランス語の特異性に触れても、それをフランコフォニーの視点で考えているものはめったにないとのことである(p.364)。そうした中で、本書が日本語に翻訳されたことには大きな意味がある。今日簡単に手に入る日本語で書かれたフランス語史の書物は3冊ほどしかないが、どれもフランス国外のフランス語について全く触れていない。「フランス語＝フランスで用いられている言語」という図式を当然の前提としているからである。フランス語をフランコフォニーの視点から論じた文献はあっても専門的なものしかないであろうから、本書の翻訳出版には大きな意義がある。これが多数の人々に読まれて、その人たちがいまだ根強い言語純粋主義とフランス中心主義の呪縛から解放されることを願う。

最後に、この翻訳について述べておこう。全体に非常に読みやすい日本語になっている点で、翻訳者の力量を高く評価したい。経歴を見る限り、社会言語学やフランス語史について専門的に学んだように見受けられないだけ

に、なおさらである。「訳者あとがき」によれば、監修者の貢献が大きいとされている。事実、本書は日本語版の監修者として最もふさわしい人物を得ている。その監修者のあとがきに、本書は原書の約4分の3の抄訳だと書かれているが、訳書も原書と同様20章ある。つまり何章かを省略したのではない。そこで原書と一部読み比べてみたのだが、パラグラフ単位で省略されているわけでもない。実は、省略しても大筋に影響のない部分を、文の単位で省略してあるのだが、訳書を読み通してもどこかが省略されたという違和感がない。これは大変な作業だったと推察できる。本書を読んでさらに詳しく知りたければ、原書を読めばよいだろう。原書の英文はジャーナリストのものらしく、平明で読みやすいのだから。

本書がどれほど際立った特徴を持っているかに関心のある方のために、本書評中で言及した「今日簡単に手に入る日本語で書かれたフランス語史の書物」をここに書いておく。また、本書はフランス語の姿の変化についてはほとんど扱っていないので、それに関心のある方にはこれらを一読されるのを勧める。

- ・ J. ショーラン (1973) 『フランス語史』 (川本茂雄、高橋秀雄訳) 白水社 (文庫クセジュ)。原書は 1969 年に出版され、原書も翻訳も現在まで読まれ続けている名著である。
- ・ 森本英夫 (1988) 『フランス語の社会学—フランス語史への誘い—』 駿河台出版。通史ではなく、いくつもの興味深いトピックについてフランス語史の観点から語ったものである。
- ・ 山田秀雄 (1994、増補改訂版 2003) 『フランス語史』 駿河台出版。ショーランのものよりも遙かに読みやすいし、比較的新しい事象まで描いている。

(にわ たかし 金城学院大学教授)